

会場模試の意義

受験生にとっては勝負の二期期がやってきました。創学舎では二か月に一度のペースで公開模試を実施していますが、中三の二期期以降は月に一度のペースに変わります。また、それとは別に会場模試(くもぎ)を三回以上受験します。そうすると九月から一月までの期間で少なくとも八回は模試を受ける計算になります。学校の実力テストも含めば、軽く十回は超えるでしょう。え、多いですか?(笑)

回数が多いのには理由があります。一つは入試の形式に慣れるため。そして、二つ目は志望校判定を出す機会を増やし、志望校の選択に使う判断材料をより確かなものにするためです。また、公開模試と会場模試の両方を受けるのにも理由もあります。それは、二つの模試で受ける意義が異なるからです。ここでは会場模試を受ける意義について頁を割きます。公開模試の意義についても知りたいという方は、通われている教室の講師に尋ねてみてください。

「彼を知り己を知れば百戦殆うからず」
有名な言葉なので聞いたことがある人も多いのでは。今から約二五〇〇年前、中国の兵法家、孫武が書いたとされている「孫子の兵法」という本の一節で、「相手を知り、自分を知っていれば百回戦っても決して負

けることはないよ」という意味です。「相手」を知ること、「自分」を知ること。会場模試を受ける意義はこの二つであると私は考えています。

まずは「相手」を知ること。会場模試は一般会場で、入試本番と同じ時間に始まり、出題形式もそっくりです。

「朝早く起き、ご飯を食べ、身支度をし、電車に乗って会場に行き、試験を受ける。何時に起きようか。そのためには何時に寝ようか。持ち物は何を持っていこうか。朝ごはんは何をどれくらい食べようか。電車の中ではどのテキストで何を確認しようか。会場は知らない人だらけ。トイレの場所もわからない。会場が暑いのか寒いのかも行ってみないとわからない。あ、朝ごはん食べすぎた。眠い……。」

会場模試は入試の予行練習です。試行錯誤を重ねながら、入試本番までに自分の必勝スケジュール、勝負飯、そして勝負テキストを確立しましょう。

次は「自分」を知ること。
大切な要素は多々ありますが、ここでは過去問演習や公開模試と重なる点は割愛し、会場模試でしか得られない部分にだけ焦点を当てます。

会場模試を受験するときは、当然ながら、本番のつもりで臨んでください。そして、自分がどれだけ力を「発揮」できるか試してみましよう。力は「持っている」だけでは意味がありません。「発揮」できてなんぼ



です。恐らく本番で実力の一〇〇%を發揮できる人はそうそういないでしょう。

入試において一番の敵となるのが、実は自分自身です。普段夜型だから試験中に眠くなる。緊張で、おなかが痛くなる。汗が止まらなくなる。頭が真っ白になる。普段、絶対にしないようなミスをする。周りの音が気になって集中できない。試験中、お腹が鳴って恥ずかしい。人それぞれ悩みは異なりますが、みんな何かしらを抱えています。緊張する場面、勝負所で自分はどうなるのか。それを知っておくことで対処法も見つかり、より良い状態で試験に臨めるでしょう。

会場模試を受けると様々な現実面に直面します。偏差値、志望校判定、力不足の自分、頑張れない自分、弱い自分、などなど。みんな何かしらの不都合な現実を抱えています。大切なのはそれらの現実から逃げないこと。まずは現実をまっすぐ受け止める。成長はそこから始まります。

(高寺)

勉強法を知らない生徒達③

●「単語は大事だよ。」と教師は言います。親もそう。そして生徒もそう思っているはずですが、実は大きな盲点があります。それは、生徒は心から大事と思っていないということ。それはどういうことか?

●まず「大事」という言葉を考えてみます。「嵐」のファンであれば、写真集もCDも、心から大事と思っています。私の連れ合い

も娘も「羽生くん」の大ファンで、写真集から何かを集めています。心から大事と思っていることがわかります。ギターを趣味とする人は、ギターと楽譜を心から大事と考えているはず。一方、生徒にとっての英単語はどうでしょう? 理屈では、観念としては「大事」と思っているでしょうが、仮に入試で英語が不要となったら、大半の生徒は英語の勉強そのものをしなくなり、当然単語も覚えようとしません。実際には、英語は必要ですし、当然英単語も身につけなければなりません。で、生徒は覚えようとしませんが、こんな感想を持ちます。「なかなか覚えられない。」「覚えてもすぐ忘れてしまう。」「覚えていられるうちに眠くなってしまおう。」

●これでお判りでしょう。大事という言葉をあえて二元化すると「心から大事」と「理屈として、観念として大事」の二つがあるということ。そして、ほとんどの生徒にとって、英単語は後者です。

●この事実を直視する所から、英単語の覚え方は始まります。順を追って説明しましょう。

①生徒は英単語を心から大事とは思わない。

②従って、興味もないし感動もしない。

③そんなものは覚えられないし、忘れるのも当然。

●まずこれを事実として認めるべきなのです。でも覚えなければ、受験を突破できない。ではどうやって覚えるのか?

●まず「覚えようとしなさい」ことです。具体的に言います。

④駅から自宅までの道を記憶するのと同じ手法を使う。途中にある公園、コンビニ、クリーニング屋、中華料理店……。こういうものを記憶したのは、それぞれの場所に殺人事件があったとか強烈な印象があるからではありません。何度も通っているからです。ただ、覚える単語は中学生でも千以上、高校生は数千に上ります。では、どうするか？

●「感情が大きく動いたものは記憶に残る」という心理に注目します。勿論、英単語で大きく感情が動くことはありません。そこで、すこしだけ感情が動く仕組みを作り、続けていくことで感情の動きを積み上げていくことにするのです。生徒がやっているのは次の方法です。



⑤一単語一秒。単語を見る↓思い出す↓「分った」↓確認する↓「あつてた」。これを繰り返すのです。□を一秒でやります。

思い出せないときは「」の部分「分らない」「あ、そうか」に変わるだけです。そして思い出せなかったものは、その場でもう一度(ダメならさらにもう一度)やって、「分った」「あつてた」を経験します。波線部が感情の動きです。これを一日一〇〇語と決めて、電車の中の空き時間で繰り返します。覚えなくてよい。繰り返す中で自然に記憶されます。高三生で多いのは一日四〇〇〜五〇〇個で四日〜五日で一周する組み方です。時間は一〇〜二〇分程度。思い

出すために、五秒とか十秒とか粘る人がいますが、それは無駄です。「思い出そうと粘る」のは、脳が最も疲れる行為です。やるべきです(テストのときは別の取り組み方があります)。また、本番では〇・一秒で思い出せるようにしておかないと高得点は狙えません。五秒とか十秒かけて思い出したとしてもそれは本番ではまだ使える知識になっていないということです。そもそも、思い出そうとしている間に脳は疲れ、時間は経ち、今読んだ内容の記憶も薄れていきます。

●勿論この作業を始めるには、準備が必要です。読めない単語はカタカナをふっておくとか、その訳の意味が分からないときは調べるなど。因みに、発音記号で読めという人は多いのですが、中学でも高校でも教えることは義務付けられていません。これを自力で読めるようにしろというのは勝者の発想です。スタートはカタカナでやむを得ないと思います。

●実はこの手法は、古文単語、古典文法、歴史など、あらゆる科目に使えます。しかし、実行した大人はまず皆無。従ってまず理解は得られません。唯一の理解者は生徒達。勿論、初めて聞くことです。最初は信じません。疑いながらもやってみようちにだんだん信じてくれるようになります。そして、スピードも上がり、一日にやる量も増えていきます。この手法は私が浪人時代に四時間で毎日五教科七科目をさばっていた時に考えたことに基づいていますが、それはまた別の機会に。(小林)

流した涙は？

夏は暑いのが当たり前だが、今年の夏は実に暑かった。熊谷は四十一度を超え観測史上最高気温を更新した。今の住まいに移るまでエアコンのない生活を送っていたが、そんな私も今年の夏の暑さには音をあげた。体調管理が第一と自分に言い聞かせ、エアコンを積極的に使うことにした。今年の夏の電気代は果たしていくらになるのだろうか。請求書を見たくない自分と見てみたい自分がいる。



あついのはこの夏の暑さばかりではなかった。秋田県代表の金足農業高校の甲子園での活躍もまたあつた。正直、野球にあまり興味がない私には、地元の高校が勝ち進まない限りは特に興味を示さないのだが、いろいろニュースで彼らのことを知るにつれ、判官びいきなのか、いつしかテレビの前で彼らを応援していた。結果は残念ながら決勝で敗れてしまったが、多くの人の心を打ったのではないだろうか。この金足農業高校に限らず多くの球児たちが、この甲子園に出場するためにどんなに厳しい練習をしてきたのか想像に難くはない。試合で敗れ、流した涙は努力に裏打ちされた涙に違いない。しかし、流す涙はいつもそのような涙ばかりとは限らない。私が中学三年の夏に流した涙がそうである。

私は中学時代卓球部に入っていた。そう生徒の前で話すと苦笑いをされる。その意

味は何となく察しが付くが、当時全国大会出場という大目標を掲げ、休みもあまりなかった。その練習量は学校で一、二位を争うほどだった。正直、好きで入った部活ではなかった。どの部活にも入らないという選択肢はなかった。仕方なく入った部活だった。そんな気持ちで続けた部活だったが、三年生の夏最後の大会、これまで試合では負けたことがない格下の中学校と団体戦で対戦。勝敗を分ける最後の試合を私が預かったが、負けてわたしの夏は終わった。

甲子園出場の彼らほど練習したわけではないし、それほど思い入れのある部活ではなかったが、そんな私もやはり負けるのは悔しかった。努力もせずに良い結果を期待していた自分がいた。その時は格下と見下していた相手校だが、今思えば最後の夏の大会ということで練習に練習を重ねてきたのだろう。

どんな人も残念な結果になれば悔しがるものだ。いまだかつて不合格になって笑顔でいた生徒はいない。中には何食わぬ顔をしている生徒もいたが、こちらにはその心の内は丸見えだ。

努力は結果を裏切らないといわれるが、時に入試結果はこれまでの努力を形にせず、残念な結果を突き付けることがある。たとえ残念な結果になったとしても、そこで流す涙が、私が中三の最後の夏で流したような涙ではなく、多くの球児が流した努力に裏打ちされた涙であってほしいと思う。(小池)